
 書 評

現代天文学講座 15 「天文学史」

中山 茂 編

(恒星社, 昭和57年1月25日発行, 294頁, 2800円)

本講座は、約20年前の「新天文学講座」の新訂版であるが、天文学の歴史の内容は20年間でガラリと変わる筈はないから、本書は新天文学講座の「天文学の歴史」を当然強く意識して編まれている。編者のまえがきによれば、本書を意識的に前著と違う物にしようと思図し、構成もすっかり変えたところ。確かに両書の内容を比べて見ると、前著では、西洋天文学史、東洋天文学史、江戸時代の天文学といった編年的な通史ないしは概論が主であったのに対し、本書では前著の欠を補って、天文学史上の主要テーマに絞って、深く掘り下げて解説しようとする姿勢が窺える。また、通史では余り取り上げられないテーマにも言及している。

天文学史の比較的広汎な分野を扱った書には、本書に半年程先立って出た、故広瀬秀雄先生の「天文学史の試み」がある。個人の執筆になる場合、著者の一貫した物の見方で統一される良さが出る反面、専門でない分野や興味の薄いテーマは、迫力に欠けた記述になり易く、同書もその例外ではない。一方、本書の様な編纂物では、そうした問題はない代りに、各章の有機的なつながりを欠く場合が多い。本書の編者は、天文学のヒストリオグラフィーと称する序章を設けて、この点を補っている。

編者による序章では、古代天文記録の研究を、天文定数の決定、年代学と東西交渉史への応用の3つの観点から簡単にまとめた後、近世以降の天文学については、歴史学としてのパラダイムが成立しつつある分野を挙げて解説している。第1章古代・中世天文学史では、パピロニア、ギリシャ、インド・アラビアの数理天文学を、ノイゲバウァの大著「古代数理天文学の歴史」などから引用してまとめている。第2章近世天文学史では、コペルニクスからケプラーに至る宇宙観の転換と、ニュートン力学の成立が、これも数理に重点を置いて解説されている。この両章に見られる様に、主要テーマに絞ってそこに表われる物理と数学を丁寧に説明しようとする姿勢は、近年他の類書にもあるがやはり好感が持てる。

第3章近代天文学史では、主に恒星天文学の成立、20世紀初頭までの天体物理学の抬頭が扱われる。第4章現代天文学の革命では、電波天文学とX線天文学の成立にかなりのページが割かれ、話はNGTやスペースコロニーにまで及ぶ。巨大科学の側面を彷彿させる為としても、しかし、天文学の歴史の中にこの様な話題まで盛

りこむのはいかがなものであろうか。

第5章中国天文学史再見では、過去10年間の考古学出土品中の天文文物を、秦の統一前後を中心にして紹介している。特に長沙・馬王堆出土の天文資料を扱った部分が興味深い。第6章日本の暦法では、中国暦施行の時代と、貞享暦から天保暦に至る4回の改暦が、短いが要領よくまとめられている。第7章、8章は正統的天文学史から見れば多少異質の分野に属する、世界の民間暦と、望遠鏡発明以前の天文観測機器を取扱っている。東西の広い範囲の儀器が網羅されており、構造や具体的観測方法、観測精度にまで触れている点も目新しい。

第5章の、“彗星は5惑星の精が散って生じるとする、漢代までの思弁的展開と、現在の分類である周期彗星中の木星・土星族との間に、何らかの対応解釈が発見できるかどうかは不明”という件りは、両者に対応関係を求めること自体に無理があるのではないだろうか。第4章では、太陽系天体の研究は省くと前書きで断ってはいるが、“その技術的・社会的側面”という副題からしても、このテーマを除外したのは大いに残念な気がする。惑星探査の成功と技術、その前後に於ける米国内での惑星研究者の急増と激減、惑星天文学への、地球物理、気象、地質学者の侵入は、やはり現代天文学史上特筆すべきトピックであったと思う。

新天文学講座の天文学史と合せ読めば、古代から現代に至る流れが通観できるだろう。特に天文教育に携わる人に勧めたい。また別巻として、Dictionary of Scientific Biography から天文学者を抜萃したという人名辞典が用意されているそうだが、この方も楽しみである。

(中村 士)

 新刊紹介

 AN ATLAS OF THE NORTHERN MILKY
 WAY IN THE H-ALPHA EMISSION

上記の写真集(B5判, 写真83枚, SAO星, NGC天体を含むオーバーレイ83枚等)が京都大学宇宙物理学教室から出版され頒布が開始された。

問い合わせは

京都大学理学部宇宙物理学教室アトラス係宛。

(編集)